

「東部」から「西部」へ——ヘレン・ハント・ジャクソンにみる 19世紀アメリカ女性作家の移動と主題の変化

金澤 淳子

つくり領域

(2003年9月5日受理)

From “the East” to “the West”: Helen Hunt Jackson, the Trans-location and the Transition of Themes of the Nineteenth-Century American Woman Writer

Junko KANAZAWA

Tsukuri College

(Received September 5, 2003)

Helen Hunt Jackson, best known today for her popular nineteenth-century novel, *Ramona*, began her career as a poet writing traditional New England elegies. She tried other genres, including contemplative poetry, travel writing and novel, and always adhered closely to the traditional expectations of woman writers. Jackson was praised particularly for her contemplative poetry during the ruthless, materialistic “Gilded Age” because many readers at that time longed for literary expressions of what was moral and ethical. But in 1873, when she left the East for her health and settled in the West, her traditional style changed. Though Jackson had started her career within the genteel tradition, she departed from its influences and gained a unique point of view on the West. In Colorado, she developed a standpoint different from that of most Easterners. As a woman writer, Jackson was ahead of her time in praising and enjoying life in the West. In her famous novel, *Ramona*, readers can discern the viewpoints of Spanish-Mexicans and Native Americans and appreciate the deep resentment felt by these indigenous people towards the encroaching American Yankees.

1. はじめに

Helen Hunt Jacksonは19世紀後半に活躍した詩人であったが、今日では詩人としてよりも、ネイティヴ・アメリカンを題材にしたベストセラー *Ramona* を書いた作家として文学史にその名を留めている。ジャクソンはマサチューセッツ州アマーストの生まれであり、その後、数多くの雑誌に作品を掲載しながら、国内外を問わず様々な土地を巡り、本拠地も東部から西のコロラドへと移し、最後はさらに西のカリフォルニアで生涯を終えた。因みにジャクソンはやはりアマーストで生まれ育った詩人 Emily Dickinson と同い年で幼馴染であるが、生涯の後半を父の屋敷からほとんど出ることなく、生存中は匿名で数篇の詩を雑誌に掲載したに過ぎないディキンソンと比べ、全く対照的な生涯を送った同時代人であることは興味深い。

ジャクソンの詩人としての足取りを辿ることでもまず気

付くのは、1873年を境にその活動の内容が大きく変化していることであろう。生活の本拠地についても1873年以前はニューポートを中心に東部で活躍していたのに対し、1873年以降は西部コロラドへと住居を移している。この移動を現在の感覚で単に東から西への物理的な移動と見るのは早計であろう。当時のニューポートは東部の文芸人が集う、文化的な雰囲気にも恵まれた場所であった。一方、ジャクソンが移り住んだコロラド州コロラドスプリングスの町はまだまだ建設されて三年目であり、東部からやって来た者にはお世辞にも洗練された土地とはいえない状況であった。物理的に限らず文化的にも大きな違いを孕むこの移動を、単にジャクソンの転地療法という健康上の問題だけで捉えるのではなく、19世紀の女性作家が創作する際に、この移動が作品の性質の変化とどのように結び付いたものになっているか、という問題を当時の東部における文学の主題の伝統を踏まえながら確認したい。

2. 詩人ジャクソン1——哀歌から観想詩へ

まず、1873年以前に、ジャクソンが東部で活躍していた頃の創作活動からみてみたい。ジャクソンの詩が初めて雑誌に掲載されたのは1865年7月20日付けの *Nation* で、“Lifted Over”というタイトルの追悼詩であった。

LIFTED OVER

As tender mothers guiding baby steps,
When places come at which the tiny feet
Would trip, lift up the little ones in arms
Of love, and set them down beyond the harm,
So did Our Father watch the precious boy,
Led o'er the stones by me, who stumbled of
Myself, but strove to help my darling on:
He saw the sweet limbs faltering, and saw
Rough ways before us, where my arms would fail;
So reached from heaven, and lifting the dear child,
Who smiled in leaving me, He put him down
Beyond all hurt, beyond my sight, and bade
Him wait for me! Shall I not then be glad,
And, thanking God, press on to overtake?

幼い足が躓きそうなところにくると
心優しい母親がその足取りを導き、
愛情深い腕に幼子を抱き上げ
危険を越えたところで降ろすように、
我等の天なる父は尊い坊やが、
私に導かれて石を超えるのをご覧になった。
その私はふらつきながらも、

我が子を助け続けようとしていた。
神は愛しい我が子の足元がふらつき、
二人の前途が厳しく、私の腕が弱りそうなのをご覧になり、
天から御手を差し伸べられ、愛しい子を抱き上げられた
我が子は離れ際に微笑み、神はその子を
どんな苦しみも越えたところ、私の視界の届かぬところ
に降ろし
そこで私を待つように言い渡された。ならば私は喜び、
神に感謝しながら歩み続けて我が子に追いつこうではな
いか。

最後の結びの一行半を見ると、我が子が神に召されたのも、自分達の窮状をむしろ神が救ってくれたためなのだから感謝してその御心に従おう、という趣旨の結びになっている。しかしそうした結びに至るまでの十二行を見ると、伝統的な主題展開の枠内でありながらも、失っ

た我が子にまつわる単語“tiny,” “little,” “precious,” “sweet,” “dear”が随所に目に付き、我が子に対するいとおしさが散りばめられていることも見落とせない。とはいえ、結びはやはり、神の御心のままに、と閉じ、母親の嘆きはほとんど顔を出さず、むしろ、親しいものとの別れを天の配剤として受け入れる信仰心が全面的に出て、強調する展開になっている。悲しみに揺れる心がそここに微妙に表れながらも、哀歌の慣例的な形式を崩すまでに至らず、伝統に沿う上では当然行きつくべき結びを確実に果たしている。その上で、この詩は Ann Bradstreet 以来、繰り返し用いられてきたニュー・イングランド的な信仰にのっとった展開の系譜にあるものといえよう。

実際、我が子を亡くした母親という設定は、ジャクソン自身の体験に裏打ちされたテーマでもあり、ジャクソンは数多くこのテーマを詩で手懸けた。ジャクソンは長男、夫にと立て続けに先立たれ、最後に残った次男も亡くしてからまだ二ヶ月しか経っていない時期に掲載したのがこの“Lifted Over”である。ジャクソンはこの哀歌を書くことで、個人的な悲しみを克服したのと同時に、詩人としての出発も果たしたことになる。35歳で天蓋孤独となったジャクソンは一人で生き抜いて行くためにも、詩人・作家として独り立ちする必要があった。そのため、時代の好みに従った作品を書き、読者の期待に応えた作品イコール優れた作品であるということを念頭において創作していたことは事実である。¹⁾

しかし、ジャクソンのその後の作家活動を辿っていくと、このニュー・イングランド的な伝統から次第に離れて行ったことがわかる。ここでいう伝統とは先の詩にも窺われるような、東部ニュー・イングランドで中心に見られる表現の慣例であり、その伝統からジャクソンがどのように掛け離れて行ったのか、その変化を支え、可能としたジャクソンのダイナミズムも一緒にその足取りを追って行きたい。

その上で、ジャクソンにおける「東部的」なものとはなにか、ということをも確認する必要があるだろう。そしてそのためにはジャクソンが東部で詩人として評価された、“contemplative poetry”「観想詩」というジャンルについて見てみたい。「観想詩」という言葉はジャクソンの死後に書かれた追悼文に登場する。

ジャクソンが観想詩の分野に参加すると、他に並ぶものがない。「最善」(“Best”)のような詩を人々は一般的に気に入るだろうけれど、それは非常に賞賛すべき作家として、また彼女が文学において勤しむべき観想詩として主にそうした賞賛を受けるのである。彼女の作品の中でこの種類こそエマソンを非常に喜ばせたものであり、それは彼の選集への選択の仕方からも明ら

かである。(Shinn 319)

「観想詩」とは、人生の様々な局面や要素を捉えた詩といえる。このジャンルでジャクソンを非常に高く評価したのが文芸批評家 Thomas Wentworth Higginson であった。ジャクソンの死後、ヒギンソンは同時代のアメリカの代表的作家を選んで *Short Studies of American Authors* という一冊の本にまとめ、Edgar Allan Poe, Nathaniel Hawthorn, Henry James, Henry David Thoreau, Louisa May Alcott, William Dean Howells という錚錚たる顔ぶれにジャクソンも加えた。今ではこうした顔ぶれと共にジャクソンを並べること自体不自然に映るが、いかにヒギンソンがジャクソンのことを高く評価していたかが窺われる。また、Ralph Waldo Emerson がジャクソンの詩の愛読者であることは先の引用の Shinn と同様ヒギンソンも触れており、エマソンがジャクソンを評価するにあたり、ジャクソンをアメリカで最高の女性詩人ばかりか、詩人として最高だと答えたくだりを紹介している。

“H. H.”[ジャクソン] をアメリカで最も優れた女性詩人と思うかとエマソンは訊ねられ、彼特有の瞑想的な様子でこう答えた、「恐らく我々は『女性』という言葉を抜いた方が良いでしょう」と。こうして彼女を、少なくともその時の衝動によるものかもしれないが、詩人の頂点に位置付けたのである。彼は彼女の詩が新聞に載ると切りぬいて持ち歩き、音読するのを常としていた。彼の特別のお気に入りの詩は最も凝縮し、深みのあるもので、コールリッジが読者に敬意として使うある種の曖昧さを含む作品であった。(41)

エマソンは 1875 年に詩のアンソロジー *Parnassus* を出版し、その序文でアメリカ詩人としては唯一ジャクソンの名前を挙げて賞賛しているほどの気に入っていたことも、ヒギンソンの引用した逸話を裏付けている。因みにエマソンはこの詩集には Walt Whitman の作品を全く収録していない。エマソンが一番気に入っていたというジャクソンの詩が次の引用になる。

“Thought”

O Messenger, art thou the king, or I?
Thou dalliest outside the palace gate
Till on thine idle armor lie the late
And heavy dews: the morn's bright, scornful eye
Reminds thee; then, in subtle mockery,
Thou smilest at the window where I wait,
Who bade thee ride for life. In empty state

My days go on, while false hours prophesy
Thy quick return; at last, in sad despair,
I cease to bid thee, leave thee free as air;
When lo, thou stand'st before me glad and fleet,
And lay'st undreamed-of treasures at my feet.
Ah! Messenger, thy royal blood to buy,
I am too poor. Thou art the king, not I.

使者よ、あなたが王なのか、私がなのか。
あなたは宮殿の門の外で無為に過ごし、
とうとうあなたの付けていても無駄な甲冑に夜の重たい露が降りる、
朝の明るく、冷笑的な眼差しに
あなたは私の命令を思い出し、やや嘲りを込めて
私が待ちわびて立つ窓に微笑みかける、
私はあなたに生気を探しに出掛けてくるように命じていたのだ。
空しくも私の毎日は過ぎ、予想を裏切りあなたの帰りは遅い、
ついに、哀しく失望し、
私はあなたに命じるのを止め、空気の如く自由にさせておく、
すると見よ、あなたは私の前に素早く進み出て立っているのではないか、
そして夢にも見たことが無いような財宝を私の足元に置く。
ああ、使者よ、あなたの王家の血統は
私には貧しくて買えません。あなたが王であって、私ではないのです。

考えや思いつきがいかに自分の思うようにならないものなのか、求めているときにはなかなか浮かばず、諦め掛けた途端に閃く、という状況を捉えた詩である。先の哀歌にも共通するが、ジャクソンの詩で特にソネットのような型で書かれた詩は展開が非常に緊密であり、行またがりも伴い、次々と動きの描写が盛り込まれていく。14 行の中で接続詞が六つも使われているのが目立ち、“till” “then” “while” “at last” “When” “And”，とかなり欲張った展開のしかたをしている。こうした特徴は、凝縮した行数の中で「思考」という抽象的なものを擬人化して描くことによって寓話のようなわかりやすさを演出しているともいえる。ジャクソン自身、ページを多く費やすよりも、短ければそれだけ作品を仕上げる熟練が必要だと考え、ソネットのような比較的短い形式の詩を好んでいた。ジャクソンのタイトルのつけかたや、主題の捉え方はエマソン自身の詩とかなり類似している。例えばジャクソンの詩で観想詩にあたる作品のタイトルをいくつか挙

げてみると“Truth”“Distance”“Doubt”“Triumph,” “Danger,” “Freedom” “Chance” などがあり、こうした抽象名詞をタイトルにして、詩を展開して行く方法はエマソンにも共通しているだろう。

さて、ジャクソンが1860年代後半に「観想詩」を中心に活躍した時代背景はどのようなものであったのだろうか。当時のアメリカは南北戦争後に急速に社会がいわゆる「金めつき」時代へと突入していった時代にあたる。物質的な利益が露骨に追求され、そのために却って、人々が精神的なものを渴望した時代であったとも言えよう。詩についても同様に、人生の様々な局面を時には道徳的に、また時には宗教的に扱う「観想詩」が尊重された時代にジャクソンは活躍したことになる。例えば、エマソンが当初は型破りな詩人として1840年代に出発しながらも、結局、時代を経て、1860年代後半にはニュー・イングランドの尊敬すべき、道徳的な詩人としての理想像に摺りかえられてしまった状況も、“moral”を説くことが詩人に求められた時代を背景にしていることを考慮すれば必然的な成り行きだろう。²⁾ 因みに1870年にWilliam Cullen Bryantが編集した詩のアンソロジー*New Library of Poetry and Song*では、“The Course of Life”のパート、つまりは観想詩に相当するパートに集められた詩のタイトルとして“Time” “Life” “The Past” “The Youth” “Fate”といったものが並び、ジャクソンやエマソンのタイトルとの共通性が窺われる。

確かにジャクソンの詩は擬古調、頓呼法を用いることでいささか持って回った表現になり、また、主題の捉え方も「観想詩」のジャンルに入る。しかしここで同時に注目したいのは、ジャクソンの観想詩が必ずしも道徳的、教訓的な設定に徹しきれていない面を多分に抱えている点である。たとえば先に引用した“Thought”でも、道徳的になにかを説く、というよりも、むしろ翻弄される語り手をユーモラスに表現している。別の「観想詩」でも諷刺や毒を含んでいるようなものさえ見受けられる。

また、1870年にジャクソンが詩集を出した際に書かれた同時代の批評では、ジャクソンの道徳性よりも、むしろ詩の表現の力強さを認めている点も見落とせないだろう。

これらの詩は顕著な力強さを印象として与え、いまだ完全に円熟したものとはいえなくとも円熟しつつある作品である。想像力は非常に斬新で、エリザベス・バレット・ブラウニング以降のいかなる女性詩人にも勝る感情の強さが見受けられる。

ジャクソンの表現の力強さについてはEmily Stipes Wattsも指摘している。ワッツはAnn BradstreetからEdna

St. Millayまでの女性詩人を六つの時代区分に分けて論じる際に、感傷的な詩人に見られる、「優美な、あきらめのメランコリー」的作風とは対照的に、ジャクソンを「繊細度が低く、か弱さも少なめの」力強い作風の詩人の一人として取り上げている。ジャクソンの「観想詩」に見られる、時代の風潮とは異なる性質とその表現の力強さは、1873年以降、ジャクソンの作品が変化して行く上で、それを支えるダイナミズムとして捉えられる要素だといっても過言ではない。

3. 詩人ジャクソン2：「東部」から「西部」へ

1873年を境にジャクソンの生活は大きく変化していく。まずは1873年秋に中西部のコロラドへ移ったことが最大の変化といえるだろう。東部の湿気の多い夏の気候で、ジフテリアと赤痢を併発し、体力的にかなり消耗したジャクソンは、医者に転地療法を勧められてコロラドへ移動したのである。さらにもうひとつ大きな変化は、コロラドへ移って二年後の1875年に土地の実業家William Sharpless Jacksonと再婚したことである。東部から中西部へ移り、そこで旅人、滞在者としてではなく、その土地で暮らす者としての視点を持ち合わせたことによって、ジャクソンの創作の姿勢にかなり大きな変化を見出すことが出来るのである。

ジャクソンにとってコロラドの第一印象は必ずしも良くはなかったようで、「どうしようもない失望感」を味わった様子を、次のように書いている。

最初に町を見下ろした瞬間に希望のない幻滅感に突如襲われたときのことを忘れられない。11月の薄暗い日だった。私は具合が悪く、落胆しながら大陸を横断し、体を生かしてくれる気候を探していた。目の前、東の方角には荒涼とした、むき出しで、単調で陰鬱な平原が広がっていた。背後、西の方角には、黒々とした山並みが聳え、頂きに雪をかぶり、岩壁で囲われ、いかめしく、無慈悲な、心を和ませることのない風景だった。間に町があったが、小さく、整然としていて、出来たての木陰のない町だった。「こんな場所にいるだけで死んでしまう」私は苦々しく思った。「病気で死ぬ方がもっと自然だわ。」(*Bits of Travel at Home*, 224)

ジャクソンがコロラド・スプリングスに来たのは、町が建設されていまだ浅い三年目のときだった。体調が悪かったことも手伝って、自然に恵まれていることと同時に歴史や文化もある東部からやってきた人間の率直な反応が不満となって出ているのだろう。

しかし、ここで興味深いのは、ジャクソンがコロラド

に来たちょうどその前後、1872年から1874年にかけてウィリアム・カレン・ブライアントによる編集で *Picturesque America* というピクチャレスク本が出版されていることである。それまでの代表的なピクチャレスク本は北東部の風景しか扱っていなかったのに対して、ここで初めて西部の風景も登場したのである。したがって、ジャクソンがコロラドへやって来た時期とは、人々の、(あくまでも東部の人々といったほうが正確だが)、人々の西部の風景に対する視覚的な意識変化が起こりつつあった、まさにちょうど過渡期ともいえる時期に相当していたのである。

ジャクソンに話を戻すと、初めは無味乾燥に見えたコロラドの山々も次第に気に入るようになり、次第にコロラドに対する気持ちも変わっていく。その気持ちの変化はジャクソンの創作活動にどう反映したのだろうか。まずはジャクソンの作品の主題がさらに広がり、国内の旅行記を書いた点をあげることができるだろう。それまでもジャクソンは旅行記を出し、ヨーロッパをめぐる旅行記では大変な好評を博したが、1878年にカリフォルニア、コロラドといった地域を扱った随筆を出し、例えばコロラドについても次のような描写をしている。

西のほうを見ると、ひたすら山だけが目に入る。山々の頂きが空に、1000、12000、14000 フィートの高さに聳える。山麓の丘陵地帯はほとんどプラトーのふもとにまで伸び、プラトーの上に町がある。山々の頂きが美しいのか、丘陵の方が美しいのかわからず、はっきりと言えない。(231)

第一印象ではいかめしかった山も、ここでは美しい対象として扱われているのである。ヒギンソンはジャクソンが西部を扱ったこの本もやはり高く評価しており、「彼女の旅行記は明晰で引き締まり、力強い」と誉めることで、地元の他の作家たちよる作品と大きく区別している。(49-50)

もちろんジャクソン以前にも西部の旅行記は存在している。例えば Francis Parkman の *The Oregon Trail* (1849)、或いはジャクソンと同時代の Mark Twain による *Roughing It* (1872) などを挙げることができる。また詩についても、ブライアントや Lydia Sigourney などのような詩人たちがネイティブ・アメリカンを題材に西部の詩を書いている。けれども東部人としての眼差しで書くのではなく、コロラドに住む者の眼差しで西部の風土、風景、そこで暮らす人々の様子について書く、しかもそれを女性が書くという点では、ジャクソンは先駆的な存在と言ってもよいのではないか。さらにはコロラドの風景に美しさを捉えて描いていることも、時代のピクチャレスクの

観念を先取りしたといえるだろう。

コロラドの風景に対する見方が変化した様子はジャクソンの次の詩にも現れている。抽象的な観念を「観想詩」にするのとは異なり、目の前の風景をかなり写實的に捉えた作品であることにも注目したい。

Cheyne Mountain

By easy slope to west as if it had
No thought, when first its soaring was begun,
Except to look devoutly to the sun,
It rises and has risen, until glad,
With light as with a garment, it is clad,
Each dawn, before the tardy plains have won
One ray; and after day has long been done
For us, the light doth cling reluctant, sad to leave its brow.
Beloved mountain, I
Thy worshipper as thou the sun's, each morn
My dawn, before the dawn, receive from thee;
And think, as thy rose-tinted peaks I see
That thou wert great when Homer was not born.
And ere thou change all human song shall die!

太陽を敬虔に眺めることだけを
考えているかのように、なだらかな勾配で西へ
せりあがり始め、
山は聳え、上がりきり、ついには喜びながら
暁の度に日の光を衣装のようにまとう、
朝寝坊の草原が一筋の光線を
手に入れる前に。一日がおわりしばらく経った後も
光は惜しみつつ纏わり付き、その縁を離れるのを悲しがる。
愛しい山よ、
お前が太陽の崇拝者であるように、私はお前の崇拝者、
その私は
毎朝、暁の前に、お前から私の暁を受け取る。
その薔薇色の頂きを眺めながら、こう思う、
ホメロスが生まれる以前からお前は偉大であったのだ、
そしてお前が変わるなら、その前に人の歌はみな死に絶
えてしまうだろうと。

ジャクソンがコロラドの自然を直接歌ったとわかる、数少ない詩のひとつである。ここでは、完全に山は崇拝の対象になっている。そもそもこの山の名前はネイティブ・アメリカンのシャイアン族に由来していることも崇拝という概念と関係しているだろう。先のコロラドの第一印象では「黒々とした山並みが聳え、頂きに雪をかぶり、岩壁で囲われ、いかめしく、無慈悲な、心を和ませるこ

とのない」様子だった山並みもここではまったく見方が変わり、崇拜の対象にさえ変化している。

この詩の題材となっている *Cheyenne Mountain* はコロラド・スプリングスの町から4マイルほどの距離にあり、ジャクソンが好んでドライブに出掛けた場所のひとつで、コロラドにおけるジャクソンの生活と密接な関わりを持つ山だったようである。ジャクソンの日誌では、雪や嵐の日を除けばほとんど毎日と言って良いほど夫や友人たちと馬車でドライブに出掛けてはコロラドの豊かな自然を楽しむ様子が窺われる。ただし、ジャクソンの日誌の記述を見て気付くのは、この *Cheyenne Mountain* をジャクソンが訪れたのが、日曜日が多いことである。そもそもコロラドでジャクソンは“champion Sabbath breaker”「安息日破り」であり、手紙で宗教について語ることもなく、ましてやコロラドで教会に所属して規則正しく出席することがなかった。(Helen Hunt Jackson and her Indian Reform Legacy 89)コロラドの土地の人々も安息日のたびに夫とドライブで遠出に出掛けるジャクソンに冷やかなまなざしを向けるようになっていたようである。

ただし、ジャクソンの幼少時代を振りかえって見ると、ジャクソンはエミリー・ディキンソンと同じアマーセントの町で会衆派教会の雰囲気強い中で過ごした。ハーヴァード大学がユニテリアン派の自由主義的傾向を強めて行くのに対抗して、伝統的なピューリタン信仰の牙城として創設された大学がアマーセント大学である。ディキンソンの祖父は創設者の一人であり、ジャクソンの父もアマーセント大学の教授で、カルヴィニスト派の厳格な信仰を持った人物だった。亡くなったのもエルサレムへ巡礼に出掛けたときで、シオンの山に葬られている。したがって、少なくとも東部におけるジャクソンの出身はいかにも厳格なピューリタニズムが息づくニュー・イングランド的な土壌であったといえるだろう。

しかし、東から西へ移り、コロラドにおいてジャクソンは一族の宗教的な伝統をいわば放棄したことになる。ここで改めて先に引用した *Cheyenne Mountain* を見てみると、安息日を教会ではなく、自然の中で過ごしたジャクソン自身の姿が、そして彼女の眼差しが見え隠れしているだろう。ディキンソンの詩でいうならば「安息日を教会に行くことで守る人々がいる—/私は家に留まって安息日を守る—」“Some keep a Sabbath going to Church- / I keep it, staying at Home-”(J-324)をも連想させる。方や、東部のアマーセントで日曜日に家族が教会に出掛けた後一人屋敷に残り、果樹園の鳥の囀りに耳を傾けるディキンソン。方や、西部のコロラドで町を離れ、岩壁の聳える雄大な山のそばで日の出を見ながら安息日を過ごすジャクソン。ジャクソンは東部の先祖の伝統から脱却して、西

部の土地で新たな自分自身の価値観に基づいた暮らしを送り、そうしたなかで書いたのがこの詩だともいえるのではない。

さて、ジャクソンがコロラドに移る二年前に手懸けたシリーズの作品群についてもここで触れておきたい。*Saxe Holm* という別の匿名のペンネームによるニュー・イングランドを舞台にした小説群であり、このシリーズでジャクソンは何冊もの小説を手懸けている。コロラドへ移り、ニュー・イングランド以外の土地からの視点をも持ち合わせるようになり、ニュー・イングランドの風土、人々を描くうえで、批判的ともとれる眼差しも多々見受けられるようになるのである。

たとえば、*Hetty's Strange History* という1873年に書いた小説を例に見ると、ジャクソンと伝記的にも重ねて解釈されてきた主人公 *Hetty* は祖父から「実地的な」もの見方を受け継いだ女性という設定になっている。そのために両親の葬式でも、人々の感傷的な悔やみを嫌い、実際の忠告だけに耳を傾ける。周囲の人々との違和感、周囲の人々との間の気持ちの溝が描かれているのが次の場面である。

悲しみを感じているヘティのところに近所の人々や友人達が押しかけた。しかし皆、非常に近しく親しい人々ではあっても、ヘティの態度に当惑し、困惑し、自分たちの好意が撥ね付けられたようにさえ思った。彼女の高貴な顔は非常に悲しみにやつれ、たった一日で何歳も老けてしまったかのようだった。しかし彼女の声と微笑みは変わることがなかった。彼女はどんな同情の言葉にも耳を傾けようとしなかった。彼女は自分の置かれた不幸を人が仄めかすのも聞きたくなかった。ただ実際的な手配をする上で必要のあることについてだけは耳を傾けた。彼女の目には涙が浮かんでいたが、誰もその涙が落ちるのを目にしなかった。(Hetty's Strange History 20)

人々との意識のズレや心の隙間を扱ったものは、ジャクソンが1870年にすでに書いている詩“*The Loneliness of Sorrow*”にも同様に見出すことができる。この詩も場面としては、同じく葬式のような設定を想定できるだろう。

The Loneliness of Sorrow.

Friends crowd around and take it by the hand,
Intruding gently on its loneliness,
Striving with word of love and sweet caress
To draw it into light and air. Like band
Of brothers, all men gather close, and stand

About it, making half its grief their own,
 Leaving it never silent nor alone.
 But through all crowds of strangers and of friends,
 Among all voices of good-will and cheer,
 Walks Sorrow, silently, and does not hear.
 Like hermit whom mere loneliness defends;
 Like one born deaf, to whose still ear sound sends
 No word of message; and like one born dumb,
 From whose sealed lips complaint can never come.

Majestic in its patience, and more sweet
 Than all things else that can of souls have birth,
 Bearing the one redemption of this earth
 Which God's eternities fulfil, complete,
 Down to its grave, with steadfast, tireless feet
 It goes uncomforted, serene, alone,
 And leaves not even name on any stone.

友人達が群がり、手を取り、
 その孤独にやさしく押し入ってくる、
 愛情深い言葉をかけ、温かく抱擁し
 外の光と空気へ引出そうとする。一団の
 兄弟のように、誰もがその近くに集まり、そばに立ち、
 その悲しみを分かとうとして、
 静かに一人にしておいてはくれない。

けれども見知らぬ他人も友人達のどんな群も通りすぎ、
 どんな善意と励ましの中も
 悲しみは歩く、黙ったまま、耳を貸そうとせずに。
 まさに孤独が守る隠者のように、
 生まれつき耳が聞こぬ者のように、そのしんとした耳
 に音は
 なんのメッセージの言葉も響かせはしない。生まれつ
 き口の利けぬ者のように
 その封印された口から不満が漏れることがない。

威厳をもって辛抱強く、魂の誕生を持ちうる
 全ての他の者よりもやさしく、
 神の永遠を満たし、完成させる、
 この世のひとつの贖いを抱きつつ、
 その墓へと降りる、しっかりとした、疲れを知らぬ足
 取りで
 それは慰めを得ず、静かに、一人で進む、
 そして墓石には名前さえ残しはしない。

先に見た詩“Thought”と同様、ここでも動作を示す言葉が
 かなり盛りだくさんに使われている。悲しみを一人で癒

したい者にとっては、周囲の人々のしつこいやさしさが
 むしろささいほどである様子が、効果的に表現されて
 いる箇所である。この詩も「観想詩」の範疇に分類でき
 る作品といえるが、同じ「悲しみ」を描くにも、先に見
 た哀歌の場合とはかなり異なっている。ジャクソンはこ
 こでは信仰のありかたを慣例的に用いて処理してみせる
 のでもなく、或いは、悲しみにおける友情の有り難さを
 説くわけでもない。周りに同情してくれる友人がいれば
 いるほど、その孤独がかえって大きくなる状況を描き、
 小説の主人公同様、「悲しみ」を一人で耐える人物の毅然
 とした態度や、周囲の人々から孤立した気持ちを描いて
 いる点が目に留まる。

4. 「東部」からの脱却：『ラモーナ』へ

ジャクソンがどれほど意識していたかは不明だが、彼
 女の内面に確実にあった東部的視点と西部的視点との相
 違が表面上にはっきりと出たものとして、1879年11月
 以降、ジャクソンがのめりこんで行ったネイティブアメ
 リカンの土地を守る運動をあげることができるだろう。
 それまで女性参政権の運動にも冷ややかな視線を送っ
 てきたジャクソンであったが、1879年11月にボストンの
 会合でポンカス族の酋長 Standing Bear の話を聞き、ネ
 イティブアメリカンの悲惨な状況に衝撃を受け、ジャク
 ソンはネイティブアメリカンの土地確保の運動に専念す
 るようになる。一連の運動の中でジャクソンは文筆で訴え、
 1881年に出版した *A Century of Dishonor* では、いかに白
 人アメリカ人がネイティブアメリカ人にひどい仕打ちを
 してきたかの記録を表し、さらに1884年には、今日ジャ
 クソンの代表作となっている小説 *Ramona* を書き上げて
 いる。

ジャクソンにとって最後の作品でもある *Ramona* では、
 カリフォルニアの美しい風景描写とともに、かなり痛烈
 なアメリカ批判が強く表現されている。小説の舞台は米
 墨戦争以降の協定でニューメキシコ・カリフォルニアが
 アメリカ合衆国に移譲された後の時代になっており、ス
 ペイン系メキシコ人の視点でアメリカ人の手段を選ばぬ
 土地搾取の仕方が語られている。アイルランド人とネ
 イティブアメリカンの混血である主人公ラモーナと夫でネ
 イティブアメリカンのアレックスandroの会話には強いア
 メリカ批判の言葉が散見できる。例えば、次のような二
 人の会話の一節がある。

「それが法律なのさ。その法律を見せるために奴等ア
 メリカ人は書類を持っているんだ。いつも父が言って
 いたよ。セニョール・ヴァルデスが父に書類を書いて
 くれてさえいたらなあ！だが当時はそんな習慣はな

かった。書類を持っている者なんていやしなかった。
アメリカの法律は違うんだ。」

「泥棒の法律だわ」ラモーナが叫んだ。

「そうだよ、しかも人殺しの法律でもあるね」アレックスandroが言った。(Ramona 179)

同様のアメリカ批判は『ラモーナ』の随所に見られる。ジャクソンは東部から西部へ物理的な移動をただけでなく、西部から東部を見る、さらには非アメリカ人の立場からアメリカ人に対する眼差しを想定することが可能になったといえるだろう。その眼差しは次の詩では告発という形で表現されている。方や豊作で潤い、方や飢えて死ぬ者がいるという理不尽な状況に対する怒りが込められた詩である。子供の死を天の配剤として、運命としてそのまま受け入れる、という最初に見た詩における従順なキリスト教徒的受身の姿勢からはまったく掛け離れた展開になっている。

“Too Much Wheat.”

“Too much wheat!” So the dealers say.

Millions of bushels left unsold

Of last year’s crop; and now, to-day,

Ripe and heavy and yellow as gold,

This Summer’s crop counts full and fair;

And murmurs, not thanks, are in the air,

And storehouse doors are locked, to wait;

And men are plotting, early and late.

What shall save the farmers from loss,

If wheat too plenty makes what a dross?”

“Too much wheat!” Good God, what a word!

A blasphemy in our borders heard.

“Too much wheat!” And our heart were stirred,

But yesterday, and our cheeks like flame.

For vengeance the Lord his loins doth gird.

When nation reads such tale of shame.

Hundreds of men lie dying, dead,

Brothers of ours, though their skins are red;

Men we promised to teach and feed.

O, dastard Nation! Dastard deed!

They starve like beasts in pens and fold,

While we hoard wheat to sell for gold.

“Too much wheat!” Men’s lives are dross!

“How shall the farmers be saved from loss?”

“Too much wheat!” Do the figures lie?

What wondrous yields! Put the ledgers by!

“Too much wheat!”

O, Summer rain,

And sun, and sky, and wind from West,

Fall not, nor shine, nor blow again!

Let fields be desert, famine guest

Within our gates who hoard for gold

Millions of bushes of wheat unsold,

With men and women and children dead

And daily dying for lack of bread!

“Too much wheat!” Good God, what a word!

A blasphemy in our borders heard!

「小麦の取れすぎ！」そう売人たちは言う。

何百万ブッシェルもの去年の収穫は

売られずに残り、今日、

たわわに熟し重くなった麦は黄金のように色づき

この夏の収穫は十分ですばらしいことがわかっていて。

感謝の言葉とは異なる呟き声があたりに漂い、

倉庫の扉は鍵をかけられ、積まれている。

人々は明けても暮れても企んでいる。

できすぎの小麦が屑になってしまうなら

農夫たちを損失から救うにはどうしたら良いのか？

「小麦の取れすぎ！」ああ、なんという言葉！

この国境で耳にする冒瀆の言葉。

「小麦の取れすぎ！」我々の心は動揺した、

昨日、我々の頬は炎のように紅潮した。

復讐のために神は身構える。

国民がそのような恥ずべき話を読むときに。

たとえ肌が赤くとも我々の兄弟たち、

何百もの人々が飢えて横たわるというのに。

我々が教え、食物を与える約束をした人々が。

ああ、卑劣な国！卑劣な行い！

人々は囲いと檻の中で獣のように飢え、

我々は金が欲しくて小麦をためこむ。

「小麦の取れすぎ！」人々の命は屑だ！

「農夫たちをどうしたら損失から救えるのか？」

「小麦の取れすぎ！」その数字は？

なんとすばらしい収穫高！台帳を脇へやれ！

「小麦の取れすぎ！」

ああ、夏の雨よ、

太陽よ、空よ、そして西風よ、

二度と降るな、輝くな、吹くな！

田畑を砂漠にせよ、黄金のために
 何百万ブッシェルもの小麦を売らずに貯め込む者の
 門の内に飢饉を招け、
 男も女も子供も死なせ
 パン不足で毎日飢えさせよ！
 「小麦の取れすぎ！」ああ、なんという言葉！
 この国境で冒瀆の言葉が聞こえる。

ジャクソンの詩人としての出発点が哀歌から始まり、神の御心のままに従う趣旨で書かれていたことを考え合わせると、ここで引用した詩の最終連との隔たりの大きさには目を見張るものがある。方や飢える者がいるにも関わらず、価格操作で商人たちが倉庫に小麦をため込むという「冒瀆的な」行いに対して、呪いの言葉を結びに連ねているからである。ジャクソンが以前好んで用いたソネット形式の14行では到底収まりきれない強い思いが、ここでは形式という枠を超え、広がっていった感を与える。

5. 結び

ジャクソンは自分の死期が近づいたことを意識して、ヒギンソンに次の手紙を書いている。「*Century of Dishonor* と *Ramona* だけが、仕上げでよかったと今喜べる作品です。残りは全く重要ではありません」と。ジャクソンのある種の誇り、達成感が窺われる言葉である。ここでジャクソンが挙げている作品はいわば、「西部」に移ったジャクソンの仕事の総決算にあたるものである。「東部」の伝統や、「東部」の出版市場を意識した他の作品とはその意味でも大いに異なる。

ジャクソンの作品の変化を追うことから浮かび上がるのは、ジェンティールトラディションの表現の枠内で、東部の伝統的な「哀歌」から出発したジャクソンが、次第にその枠から出て、物理的にも、精神的にも西部からの眼差しを身に付け、伝統に縛られぬ表現にたどりついたことであろう。しかも当時の社会から求められていた「女性らしさ」(True-Womanhood)とは掛け離れ、政治的な訴えにも関わることにもなる逞しさや、時代を先駆けていった力強さを、ジャクソンの作品に見出すことができるのである。

註

- 1) Evelyn I. Banning, *Helen Hunt Jackson* (New York: Vanguard, 1973) 86.
- 2) エマソン受容の変化については特に1847年出版の *Poems* と1867年出版の *May-Day and Other Pieces* の批

評の変化に著しく表われている。批評については次の文献を参照。Joel Myerson, *Emerson and Thoreau: The Contemporary Reviews* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1992).

文献

- Banning, Evelyn I. *Helen Hunt Jackson* (New York: Vanguard Press, 1973)
- Coultrap-McQuin, Susan, “‘Very Serious Literary Labor’: The Career of Helen Hunt Jackson.” *Doing Literary Business: American Women Writers in the Nineteenth Century* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1990), 137-166.
- Higginson, Thomas Wentworth, “Helen Jackson,” *Short Studies of American Authors* (Boston: Lee and Shepard, 1888)
- Jackson, Helen Hunt, *Verses* (Boston: Fields, Osgood and Co., 1870)
- , *Sonnets and Lyrics* (Boston: Roberts Brothers, 1886)
- , *Poems* (Boston: Roberts Brothers, 1892)
- , *Verses* (Boston: Roberts Brothers, 1873)
- , *Hetty's Strange History* (Boston: Roberts Brothers, 1877)
- , *Bits of Travel at Home* (Boston: Robert Brothers, 1878)
- , *Ramona* (1884, Signet Classic, 1988)
- , *Helen Hunt Jackson Diary Transcript* (courtesy of Colorado College)
- Mathes, Valerie Sherer, *Helen Hunt Jackson and Her Indian Reform Legacy* (Austin: University of Texas Press, 1990)
- ed, *The Indian Reform Letters of Helen Hunt Jackson 1879-1885* (Norman: University of Oklahoma Press, 1998)
- Odell, Ruth, *Helen Hunt Jackson (H.H.)* (New York: D. Appleton-Century Company, 1939)
- Shinn, M. W. “The Verses and Prose of H.H.” *Overland Monthly*, second series, 6 (september 1885): 315-323.
- “Verses. By H.H.” *Atlantic Monthly* (March 1871): 400.
- Whitaker, Rosemary, *Helen Hunt Jackson* (Boise, ID: Boise State University, 1987)
- , “Legacy Profile: Helen Hunt Jackson (1830-1885).” *Legacy*, 3, no.1 (spring 1986):56-62.
- William Cullen Bryant ed., *New Picturesque America; or, The Land We Live in* (New York: D. Appleton & Co., 1872)

*本稿は日本アメリカ文学会東京支部例会(2002年9月21日)での発表原稿「『東部』から『西部』へ——ヘレン・ハント・ジャクソン」に加筆修正を施したものである。